

# 会話場面の丁寧度の測定の試み

## — 談話要素に焦点をあてて —

峯 正志<sup>注1</sup>・梁 雨馨<sup>注2</sup>

### 要 旨

会話場面の丁寧度を測定する新しい方法として、談話要素に基づく測定法を提案する。これは、依頼など、ある特定の言語行動に用いられる「呼びかけ」「事情説明」「お詫び」などの談話要素の多寡に基づいて、その場面の丁寧度を測ろうとするものである。本稿は、梁 (2014) のデータを用いてその有効性を確認する。ある場面で用いられる言語表現そのものの丁寧度と、この測定法による丁寧度は必ずしも一致しない可能性があり、この測定法には十分な存在意義があると考ええる。

【キーワード】 依頼 会話の場面 丁寧度 談話要素 測定法

### はじめに

特定の会話場面でどの程度の丁寧度で話せばいいのかが学習者にとって非常に難しい問題である。そのためには、用いられている表現の丁寧度を適切に知るだけでなく、特定の会話場面が、どの程度の丁寧度を必要としているかを知る必要がある。前者、すなわち、言語表現の丁寧度に関しては、これまでも様々な研究があり、どのような表現がどの表現より丁寧か、あるいは丁寧でないかについて知ることは可能である。しかし、後者、すなわち個々の会話場面において、客観的にどの程度の丁寧度が求められているのかを測定するのは非常に難しいことである。実際、本稿で提案する筆者らの方法のように、個々の会話場面の丁寧度を、言語表現以外の点に着目して、直接測定しようとするものは管見では見当たらない。従来行われてきたものは、日本語「表現」そのものの丁寧度について、日本語母語話者の内省に基づき測定するものばかりのようである<sup>注3</sup>。この小論では、そのような会話の丁寧度を、新しい観点に基づいて測定する新たな方法を提示し、その有効性について議論をする。

## I. 本稿で提案する丁寧度の測定法について

従来のような言語表現の丁寧度の測定法に加えて、筆者らがここで提案する新しい観点からの丁寧度の測定法とは、発話者の使用する談話要素の多寡に基づく測定方法である。

私たちは、依頼や断りなどを行うときに、呼びかけ、事情説明、謝罪など、依頼や断りを円滑に行うための付随的行動を前後に置く<sup>14</sup>。そして、私たちは丁寧度に応じて無意識にこれらの要素を省いたり重ねたりして調節する。例えば、依頼を例にとると、依頼しやすい相手に簡単な内容の依頼をするばあいには、呼びかけの後にすぐ依頼表現を使うことができるであろう。それに対して、依頼しにくい相手に難しい内容の依頼をする場合には、事情説明に加え、迷惑をかけることについての謝罪など、いろいろ弁解じみた内容の前置きをするであろう。そこで、特定の会話場面で用いられた、これらの要素の数を比較することで、会話の丁寧度が測定できるのではないかと考えたのである。

そして、このような測定法を梁(2014)<sup>15</sup>で実際に用いてみた。この測定法の有効性はこの論文では確認せずに使用していた。そこで、本稿でそれを確認してみようと考えたわけである。

言語表現の丁寧度の測定法があるのに、なぜ更にこのような観点からの測定法が必要なのかについては、第5章で述べることとする。

## II. 梁(2014)について

この測定法を用いた梁(2014)は、日本語を学習した中国人話者と日本語を知らない中国語話者が、中国語での依頼を行う場合に、言語表現の丁寧度に違いが見られるかを検証しようとしたものである。この章では、この論文の内容について簡単に述べる。

この論文の中で行った調査の対象は、日本語を学んだ中国人日本語学習者として北京師範大学日本語学部2年生および3年生の39名、日本語を知らない中国語話者として北京師範大学および中国農業大学の学生、計41名である。彼らに対して、「親しいか親しくないか」、「年上か同年か年下か」、「難しい依頼(お金を借りる)か簡単な依頼(ペンを借りる)か」という組み合わせで出来る12の場面について、「中国語」でどのように依頼するかアンケートを用いて聞いてみた。目的は、日本語を学んだ中国人が中国語で依頼するときの表現に、日本語の影響、つまり干渉が見られるかどうかを検証するというものであった。

このアンケート調査から得られた結果を、筆者らは2つの観点から検証してみた。

1つは言語表現の面からの比較である。表現が直接的なものか間接的なものかという観点から、いくつかのタイプ分けを行い、先行研究を参考に得点を付け、グループの平均点をt検定で比較するという方法である。当初はこの方法だけで検証する予定であったが、筆者らは、更に別な観点からの検証も行おうと考えた。それは、異なる方法で得られた結論が一致すれば、その結果の正しさがよりよく証明されるだろうと考えたからである。その方法というのが、ここで提案する「談話要素の観点」から見た丁寧度の測定方法である。

### Ⅲ. 談話要素の多寡による測定法

梁(2014)では、依頼という言語行動を取り上げたが、依頼を行う場合、いきなり依頼内容を相手に伝えるようなことは通常はしない。普通、呼びかけ、事情説明などの前置きを述べてから依頼を行う。このような要素を談話要素と呼ぶことにする。梁(2014)のデータでも様々なタイプの談話要素が見られたが、それらを、①呼びかけ、②事情説明、③状況確認、④詫び、⑤保証、⑥感謝、⑦依頼<sup>注6</sup>の7つに分類した。

- ①呼びかけ：注意を引くようにその人に向かって声をかける。人の名前、挨拶など
- ②事情説明：理由などを説明する
- ③状況確認：相手は、依頼を実現できる可能性があるかを確認する
- ④詫び：相手に迷惑をかけることを表明し、許しを求める
- ⑤保証：借りたものを返却することを約束する
- ⑥感謝：相手の助けをありがたいと思って礼を言う
- ⑦依頼：何かをしてもらうように、人に頼む

この測定法の方法論的根拠は、頼みやすい相手に簡単な依頼をする場合には、これらの要素があまり現れないであろう、それに対して、頼みにくい相手に難しい依頼をする場合には、これらの要素が多く現れるであろうという仮定である。言語表現においても、一般により丁寧な表現は長くなり、より直接的な表現は短くなることが知られている<sup>注7</sup>。従って、これらの談話要素が、ある特定の会話場面でどのくらい使用されているかを測定することで、その場面の丁寧度が分かると考えたわけである。

具体的にはこうである。回答の中にどのような談話要素があるか分析し、それを数えて、用いられた談話要素の合計数を得点とした。例えば、「ねえ、ペン貸して」だ

と、呼びかけ+依頼だから2点とする。「あのう、すみませんが、ペンを貸していただ  
きませんか？」なら、呼びかけ+詫び+依頼で3点となる。この場合の談話要素の長  
さや丁寧さは問題としない。「すみませんが」も「大変申し訳ないのですか」も同様に  
1点と考える<sup>18)</sup>。

梁 (2014) では、日本語を学習したことのあるグループと日本語を知らないグルー  
プについて、12の場面で、それぞれいくつの談話要素を使用しているか(得点)の平  
均値をとり、t-検定で検定することによって、日本語の干渉が見られるかどうかを検  
証したのである。結果は、最も依頼しにくい場面(親しくない;年上;お金を借りる)  
において、2つのグループに有意に差があることが明らかになった。この事実は、最も  
依頼しにくい場面においては、日本語を学習した中国人学生は、日本語を知らない中  
国人学生より、依頼をするときにより多くの談話要素を用いて頼むことが明らかにな  
ったわけである。言葉を換えれば、日本語の影響を受けた学生はそうでない学生より、  
中国語で話す際にも、より丁寧な依頼行動を行うということである。

#### IV. 測定方法の検証

本稿では、この測定方法を用いて、梁 (2014) では行わなかったいくつかの比較を  
してみたい。つまり、異なるグループの比較ではなく、同じグループが異なった場面  
で依頼の行動で差を見せるかどうかを検証する。

##### 1. 最も依頼しやすい場面と、最も依頼しにくい場面での丁寧度の違い

それぞれのグループで、最も依頼しやすい場面(親しい年下の相手に対してペンを  
貸して欲しいと依頼する場合)と最も依頼しにくい場面(親しくない年上の相手に対  
してお金を貸して欲しいと依頼する場合)での丁寧度を比較してみよう。結果は以下  
の通り。いずれのグループにおいても、この2つの場面は、丁寧度において有意に異  
なっている。当然予想されるように、依頼しにくい場面では、談話要素の使用数が有  
意に多いことが分かる。

日本語を学習した中国語話者	平均値	SD	P 値
最も依頼しやすい場面	1.45	0.64	0.0000 (p < .01)
最も依頼しにくい場面	4.55	1.80	

日本語を学習してない中国語話者	平均値	SD	P 値
最も依頼しやすい場面	1.29	0.59	0.0000 (p < .01)
最も依頼しにくい場面	3.41	1.56	

## 2. 簡単な依頼と難しい依頼における丁寧度の違い(1)

次に、簡単な依頼（ペンを貸してもらおう）と、難しい依頼（お金を貸してもらおう）の場面での丁寧度を比較してみよう。「親しい年上の相手」に対する場合に、依頼の難度は影響を与えるのであろうか。結果は以下の通り。いずれのグループにおいても、この2つの場面は、丁寧度において有意に異なっている。

日本語を学習した中国語話者	平均値	SD	P 値
ペンを借りる場合	2.61	0.78	0.0077 (p < .01)
お金を借りる場合	3.39	1.51	

日本語を学習していない中国語話者	平均値	SD	P 値
ペンを借りる場合	2.51	0.67	0.0342 (p < .05)
お金を借りる場合	2.98	1.16	

## 3. 簡単な依頼と難しい依頼における丁寧度の違い(2)

今度は、簡単な依頼（ペンを貸してもらおう）と、難しい依頼（お金を貸してもらおう）の場面での丁寧度を、「親しくない年上の相手」に対する場合で比較してみよう。結果は以下の通り。いずれのグループにおいても、この2つの場面は、丁寧度において有意に異なっている。親しくない相手に対する場合であるから、談話要素の数の平均値はIV-2.と比べ増えていることが分かる。

日本語を学習した中国語話者	平均値	SD	P 値
ペンを借りる場合	3.03	0.99	0.0005 (p < .01)
お金を借りる場合	4.37	1.90	

日本語を学習していない中国語話者	平均値	SD	P 値
ペンを借りる場合	2.68	0.71	0.0433 (p < .05)
お金を借りる場合	3.24	1.54	

## 4. 簡単な依頼と難しい依頼における丁寧度の違い(3)

今度は、簡単な依頼（ペンを貸してもらおう）と、難しい依頼（お金を貸してもらおう）の場面での丁寧度を、親しい同い年の相手に対する場合で比較してみよう。結果は以下の通り。いずれのグループにおいても、この2つの場面は、丁寧度において有意に異なっている。

日本語を学習した中国語話者	平均値	SD	P 値
ペンを借りる場合	1.45	0.64	0.0089 (p < .01)
お金を借りる場合	1.89	0.79	

日本語を学習していない中国語話者	平均値	SD	P 値
ペンを借りる場合	1.29	0.59	0.0212 (p < .05)
お金を借りる場合	1.71	0.92	

### 5. 簡単な依頼における親疎の違いによる丁寧度の違い

今度は、簡単な依頼（ペンを貸してもらう）の場面での丁寧度が、親疎でどのように違うか比較してみよう。親しい同い年の相手と、親しくない同い年の相手と比較してみる。結果は以下の通り。いずれのグループにおいても、この2つの場面は、丁寧度において有意に異なっている。

日本語を学習した中国語話者	平均値	SD	P 値
親しい同い年にペンを借りる	1.45	0.64	0.0009 (p < .01)
親しくない同い年にペンを借りる	2.16	1.01	

日本語を学習していない中国語話者	平均値	SD	P 値
親しい同い年にペンを借りる	1.29	0.59	0.0212 (p < .05)
親しくない同い年にペンを借りる	1.71	0.92	

### 6. 簡単な依頼における年齢の違いによる丁寧度の違い

最後に、簡単な依頼（ペンを貸してもらう）の場面での丁寧度が、年齢でどのように違うか比較してみよう。親しい年上の相手と、親しい同い年の相手と比較してみる。結果は以下の通り。いずれのグループにおいても、この2つの場面は、丁寧度において有意に異なっている。

日本語を学習した中国語話者	平均値	SD	P 値
親しい同い年にペンを借りる	1.45	0.64	0.0000 (p < .01)
親しい年上にペンを借りる	2.61	0.78	

日本語を学習していない中国語話者	平均値	SD	P 値
親しい同い年にペンを借りる	1.29	0.59	0.000 (p < .01)
親しい年上にペンを借りる	2.51	0.67	

本稿では以上の6つのケースのみ検証したが、いずれにおいても有意差が見られた。親疎、年齢、依頼内容の難易が、談話要素の多寡に関わっているであろうことが十分

検証された。つまり、私達が直観で認識している丁寧度の差が、数値によって明らかにされたわけである。紙数の関係でその他の場面の比較は割愛するが、検証していない他の場面でも有意差があることは十分考えられる。また、たとえ有意差が現れなかった場合でも、それ自体は意味のあることであり、むしろなぜ有意差がないのか、つまり差がないのかについて更なる考察を行うことで重要な示唆が得られる可能性もあるだろう。

このように、この測定法は非常に単純でありながら、それでいて非常に有効であるように思われる。

## V. この測定方法の意義

このような測定方法は本当に必要なのか。言語表現の丁寧度の測定だけで十分ではないかという議論が当然生じるであろう。筆者らは、これに対して、この測定法は十分存在意義がある、というよりむしろなければならぬと考える。

その理由は、梁(2014)で見られた、言語表現と談話要素それぞれで測定された丁寧度の違いの存在である。上述したように、言語表現の丁寧度と、談話要素での丁寧度は一致するものと予想して、この検証を行ったわけだが、実際の結果は予想と異なるものであった。日本語学習経験のある中国語話者と、日本語学習経験のない中国語話者において、確かに違いが見られたのであるが、その違いの現れる場面が異なっていたのである。「言語表現」においては最も依頼しやすい場面で違いが現れたのに対して、「談話要素」の数では最も依頼しにくい場面で違いが現れたのである。両者とも同じ場面で違いが現れると考えていた筆者らにとって、この結果は大変意外なものであった。

この事実についての解釈は別稿に譲る<sup>18)</sup>が、はっきり言えることは、言語表現の丁寧さは、場面の求める丁寧度に必ずしも忠実に合わせているわけではないということである。例えば、丁寧に話さなくてもよい場面でも、私たちは丁寧に話す場合もある。レストランで水を頼む場合には、相手はそれをする義務があるわけなので、比較的ぞんざいな「水をください」でも、「水を持ってきてください」でもいいはずだが、「水を持ってきていただけませんか?」と頼むこともある。むしろ筆者自身の経験では、丁寧に頼むことが多いような気さえする。言語表現はこのように、意識的に表現を変えることが可能だが、談話要素の使用はかなり無意識的に行われるので、言語表現に頼る測定法よりも、談話要素の数を元にする測定法の方がより客観的に測定できるのではないかと考えられる。

そう考えた場合、本稿で提案したような、談話要素の数に基づく測定法は十分意味のあることである。

## おわりに

本稿では、談話要素の多寡に基づく会話場面の丁寧度の測定の可能性について議論した。この測定法はまだまだ改良の余地が多い未完成なものである<sup>注10</sup>が、様々な可能性を秘めているものであると言えるのではないだろうか。この方法は、言わば丁寧度を数値化するということであるので、これまではっきりと言えなかったことも数字で明示的に示すことが出来る。例えば日本語の依頼において、年齢と親疎、依頼内容の難度では、どれが最も重要でどれが最も重要でないのかも明示的に表せるのではないか<sup>注11</sup>。

更に、他のことにも応用可能であると思われる。例えば、この方法が使えるようになれば、依頼だけでなく、断りや不満の表明などの、他の言語行動の測定も可能になる。これらの場合は依頼と同じなのか違うのかという点を明らかにすることが出来るのである<sup>注12</sup>。

それから、異なる言語間での比較も可能になるかも知れない。梁（2014）では中国語での依頼が対象だったが、英語ではどうなのか、スペイン語ではどうなのかといった点も明らかにできるかもしれない。

今後はこの方法の改良を進めながら、言語表現と言語行動の乖離の解明のために、対象数を増やした調査を行ってみたいと考えている。

### 【注】

- 1 国際機構留学生センター
- 2 金沢大学人間社会環境研究科国際学専攻大学院生
- 3 例えば伊藤（2006）は、断り表現の長さ丁寧度を扱っている。
- 4 この調査で用いる談話要素とは、沖（1993）が提唱した談話型の考え方に基づくものである。
- 5 この論文自体は、この方法の有効性を確認するためのものではなく、別な論点を証明するための方法としてこの測定法を使用したに過ぎない。この時点ではこの測定法の有効性はまだ確認していない。
- 6 「依頼」は前置き要素ではないが、「依頼」の表現そのものを使用しない例もあったため、それとの区別をするために談話要素として用いることにした。
- 7 文献は枚挙の暇がないが、例えば、滝浦（2008）p.26、山岡・牧原・小野（2010）p.139など。
- 8 このような談話要素の組み合わせ（談話型）は、梁（2014）では48のタイプがあった。
- 9 これについての仮説は現在準備中である。現在のところ日本語母語話者のデータがないのはっきりとしたことは言えないが、日本語話者は言語表現ではどのような場面でも一様に丁寧なものを使うが、談

話要素の面では、場面に応じて丁寧度を使い分けられていると思われる。これに対し、中国語話者は、談話要素より、むしろ言語表現の面ではっきり丁寧度を表しているように思われる。日本語話者は談話要素で、中国語話者は言語表現で、その場面の丁寧度を調節している可能性がある。このことの証明には、日本語母語話者のデータを取ると共に、日本および中国でのさらに規模を大きくした調査が必要になるだろう。

- 10 例えば、本稿では依頼をしない場合には、これは依頼そのものが不適當に感じられる程丁寧度の高い場面であると考えて、最高得点の7点を与えたが、これが適切なものであるかどうかについては再考の余地がある。
- 11 本稿で検討した6つのケースでは、依頼の難易度に関するものが3ケース、親疎に関するものが1ケース、年齢に関するものが1ケースであった。日本語を知らない中国人グループにおいては、年齢の違いではp値が0.01以下であったのに対し、難易度と親疎の違いではp値が0.05以下であった。この差は、中国人においては、依頼の難易度や親疎よりも、年齢の方が重要な要素であることを示唆している可能性があるかもしれない。
- 12 もちろん、この方法の適用が不可能な言語行動もあるだろう。この方法は、基本的には相手に言いにくいことを言わなければならないような行動にしか適用できないように思われる。相手に非常に言いやすいような行動、例えば褒めたり、喜びを伝えたりする場合には、どのような場合でもはっきりと単刀直入に表明するのが普通ではないだろうか。しかし、これらの点に関しても、今後の研究を待ちたい。

#### 【参考文献】

- 伊藤恵美子 (2006) 「日本人は断り表現において丁寧さをどう判断しているか —長さ と適切性からの分析—」『異文化コミュニケーション研究』第18号
- 沖裕子 (1993) 「談話型から見た喜びの表現結婚のあいさつの地域差より」『日本語学』第十二巻、第一号  
明治書院
- 滝浦真人 (2008) 『ポライトネス入門』 研究社。
- 山岡政紀・牧原功・小野正樹 (2010) 『コミュニケーションと配慮表現』 明治書院。
- 梁雨馨 (2014) 「日本語の学習が母語の中国語に与える影響 —依頼表現の分析から—」『2013-2014年度 日本語・日本文化研修留学生 研究レポート集』金沢大学留学生センター

# **An attempt to develop a new method for measuring the degree of politeness: Focusing on the number of pre-sequences**

Masashi Mine and Liang Yuxin

## **Abstract**

The authors developed a new method to measure the degree of politeness when a person makes a request. The developed method counts the number of presequences, which are used as pre-requests. Examples of pre-request include address, explanation, and apology. This method is based on the hypothesis that the more polite situation necessitates more pre-sequences than the less polite situation.

In this paper, the authors checked the validity of this method using the data by Liang (2014). This method is important when the cases that the degree of politeness based on the amount of pre-sequences may not match the degree of politeness based on the selection of expressions.